

広報 すぎなみ

Suginami



支えあい共につくる
安全で活力あるみどりの住宅都市 杉並

{ 12/15 }
令和元年(2019年)
No.2268

いくつもの「点」で
描く、人々の思い。

長きにわたり日本の台所として私たちの食を支え、平成30年その歴史に幕を下ろした築地市場。そこを行き交う人たちの姿に惹かれ、ドキュメンタリー映画「築地ワンダーランド」を作り上げたのが、映画監督の遠藤尚太郎さん。作品で伝えたかったこと、自身が生まれ育った杉並への思いなどを、地元・阿佐ヶ谷の映画館にてお聞きしました。



Contents — 主な記事 —

6 | 年末年始の区の業務案内 7 | 元年度上半期 区の財政状況をお知らせします 16 | 令和元年を振り返る 杉並区的主要出来事

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 | ☎ 3312-2111(代表) FAX 3312-9911(広報課直通) | 🌐 区ホームページ: <https://www.city.suginami.tokyo.jp/> | 📄 発行: 杉並区 | 📝 編集: 広報課

広報すぎなみは月2回(1・15日)発行。新聞折り込みのほか、区の施設・駅・コンビニエンスストアなどの広報スタンドに設置しています。

少年時代の記憶にある大人が、築地の人々と重なった

—遠藤さんは杉並で生まれ育ち、現在もお住まいそうですね。

半年ほど前に新居を構えて引っ越しましたが、新しい家は荻窪。相変わらず杉並ですね。生まれてこの方40年間、一度も杉並を離れて暮らしたことがないです。実家は阿佐ヶ谷なので、今日のこの辺り（スターロード商店街など）はなじみの場所。すぐそこにある居酒屋は僕の同級生が親から継いでいて、子ども同士も同い年なので今もよく飲みに行きます。



▲スターロード商店街

一子ども時代の杉並は、遠藤さんの目にはどのような印象に残っていますか？

記憶にはありませんが、飲み屋のカウンターでおむつを替えてもらっている写真が残っています。その写真を見ても感じますが、阿佐ヶ谷辺りには、どこかフーンっぽい雰囲気があったような気がします。

それから、杉並の風景といえば商店街。夕飯の買い物に魚屋へ行き、八百屋へ行き、自転車が壊れれば自転車屋まで持って行って直してもらう。テレビが壊れたら電気屋のおじさんが家まで直しにやって来る。生活の中にはいつも、活気よく働く大人たちの姿、会話がありました。

一築地市場を舞台とした映画を撮ろうと考えた背景には、どのような思いがあったのですか？

築地市場で働く大人たちは、本当にすてきで、かっこよくて。それは、

自分が子どもの頃に見聞きしてきた記憶の中の大人たちの姿にも重なるものがありました。そんな人々を主人公に、ハード面ではないソフト面から築地市場を描きたいと思ったのが一つです。また、彼らの姿に感動する一方で、僕自身が大人になり、親にもなった今、果たしてそんな大人になっているのか？ という不安もありました。現代は、パソコンに向かって誰とも会話をしないでも仕事ができるし、外出時の買い物もキャッシュレスで済ませられる。便利かもしれないけれど、それが豊かであるのかと問われると分からない。でも、築地には「人と人が触れ合わなければ生まれない何か」が確実に存在する。それが一体何なのか、僕らは次の世代にどんなバトンを渡していけばよいのか。市場を行き交う人々の営みを通して、そんな思いを描きたいと思ったのです。



大学で映像の魅力に開眼。群像劇※にこだわって20年

※登場人物一人一人にスポットを当てて、集団が巻き起こすドラマを描くスタイルの劇のこと。

一築地に限らず、「人と人とのつながり」を描くことが遠藤さんご自身のテーマであるそうですが、それはなぜですか？

人の思いやぬくもりなど、目に見えないものをいかに映像にするかというの、常に映像作家として自分に課していることですが、改めてなぜかと考えるとなぜでしょうね…？ でも「群像劇」が好きだという気持ち

は、ずっとあります。群像劇は言ってみればたくさんの点の集まりです。例えば一人の一生をじっくり描くのならば、それは長い線になるのでしょうけれど、群像劇の場合は線ではなく点。それぞれの点の中でその人の思いを表現し、たくさんの点と点がつながっていくことで、今度は線にもなっていく。そんなところに魅力を感じます。

一初めて映像作品を撮ったのはいつ、どのような作品だったのですか？

大学で映像制作研究部に入り、1年生の時にショートフィルムを作ったのが初めてです。それもやっぱり群像劇でした。1つの鍵があって、持ち主がなくなった後にいろんな人を経由して、最後は手元にまた戻ってくるという話だったと思います。8ミリフィルムでの撮影でいろいろと大変ではありましたが、映像の面白さに目覚めたのもこの時でした。高校生までは文章を書く仕事をしたいと思っていたのですが、気付けば当時から20年間、群像劇を撮り続けています。

一遠藤さんにとって、映像作品ならではの魅力は何だと思えますか？

情報には「量と質」があって、映像は量の面では文字のメディアには及びません。でも、質の面では映像だからこそ伝えられるものがあると思っています。特に現代は情報過多になりがちで、浴びるように情報を得ても、受け取った人の中できちんと消化され、とどまるものは案外少ないのではないのでしょうか。そんな中、カメラを向けた先の「その人」の口から語られるからこそ伝わり、心に残るメッセージというのは必ずある。そういった情報を届けられるのが映像の醍醐味でもあるし、僕が撮りたいものでもあります。



未来の杉並にも、温かな人の営みがあり続けてほしい

一いつか作品として撮りたい、伝えたい、残したいテーマはありますか？

「築地ワンダーランド」の制作を通して見えてきたテーマですが、「食育」や「食の未来」でもう一度、食のドキュメンタリーを撮りたい気持ちはあります。築地の取材でもこのトピックは何度も出てきて、実際に小学校や中学校の学校給食の現場も撮影したのですが、同作品では最小限しか残せなかったのです。

一ご自身が親となり、そのようなテーマに関心が深まった面もありますか？

子どもが生まれたことで思いが強くなったのは多大にありますね。以前はほとんど外食で、家にいても夜に仕事をしながら適当に食べるような暮らしをしていたけれど、子どもがいるとおのずと食卓を囲むことになる。「食」そして「未来」というものに、いや応なく向き合うことになるのが子育てです。保育園からの帰り道はちょうど夕暮れ時なので、あちこちの家から夕飯を作る音や匂いがしてくるんですよね。すると、「ああ、生活ってこういうことだったな」なんて、ふと思いついたりして。そういった気付きも、創作に生きているのかもしれない。

一杉並の町の未来は、どんなふうになってほしいですか？

町人も、時代とともに移ろうのは当然のことで、それは寂しいばかりではありません。築地から豊洲へ市場が変わっても、そこにはまた新しい人と人とのすてきな瞬間が生まれているはずですし、杉並の町も新しい店がたくさんできていますが、それはたくさんさんのチャレンジがある町ということでもあります。まさに映画で描こうとした「次の世代にどんなバトンを受け渡していくのか」だと思うのです。杉並が変化していく中であっても、この町に根付く、そして僕自身を育ててくれた「温かな人の営み」は、これからもそのままであり続けてほしいなと願っています。

情報があふれる時代だから。人にとどまるメッセージを届けたい



すぎなみビト



interview

遠藤尚太郎

プロフィール：遠藤尚太郎（えんどう・なおたろう）杉並区阿佐ヶ谷出身。映画監督/映像ディレクターとして、映画や広告などさまざまな映像を手掛けている。平成28年に公開されたドキュメンタリー映画「築地ワンダーランド」が、日本映画批評家大賞ドキュメンタリー賞を受賞、海外の9つの映画祭に正式出品され、大きな反響を呼んだ。私生活では5歳の男の子の父で、電動アシスト自転車子どもと区内の公園を巡るのが週末の習慣だそう。

遠藤監督作品紹介

その1

監督初の長編劇場ドキュメンタリー
「築地ワンダーランド」 2016年公開/110min

世界に名だたる魚市場「築地市場」に1年4カ月にわたって密着し、プライドと活気に満ちたプロフェッショナルたちの現場の日常を、細やかに捉えた作品。客のニーズを丁寧にくむ仲買人の「目利き」ぶりに注目です。



©松竹

その2

今年制作された企業ブランドムービー
「From Ocean to Dining 浜から食卓まで」 2019年制作



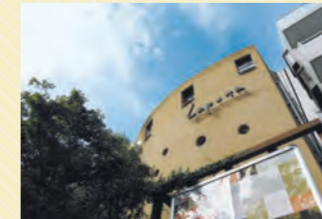
企業の創立100周年を記念し、制作された動画。美しい自然の風景を織り交ぜながら、現場の映像やインタビューを通して企業のコンセプトを2カ国語で紹介しています。

©Nichimo

遠藤監督オススメ！区内の映画館

ラピュタ阿佐ヶ谷 / Laputa ASAGAYA
最寄駅：阿佐ヶ谷(JR中央線/総武線)

日本映画の旧作などを中心に上映している小さな映画館。小劇場やレストランも備えた文化複合施設で地域内外の方々に親しまれています。今回の撮影場所として使用しました。



ラピュタ阿佐ヶ谷公式サイト <http://www.laputa-jp.com/>

YouTubeで
配信!

紙面には掲載していないこぼれ話を
動画で紹介しています。

すぎなみビト
MOVIE

すぎなみビト「遠藤尚太郎さん」のインタビューが動画でも楽しめます。右2次元コードからご覧いただけます。



杉並区公式チャンネル